

奥村和久教授記念号に寄せて

奥村和久先生は1998年10月、本学の教授に着任され、2017年3月に退職されるまで19年間の長きにわたり、本学ならびに経済学部の教育・研究の改善と発展のためにご尽力されてきました。

先生はこの間、経済学部の適切な運営と改革に大きな貢献をされました。経済学部では国際部会（のちに国際・政策部会）に所属され、部会の中心メンバーとして研究および教育の発展に貢献されました。大学院経済学研究科における社会人向け夜間主開講の国際企業環境コース設置に関わり、1999年4月から夜間開講の国際経済関係科目を担当されました。その後、全学共通カリキュラム運営委員を務められたのをはじめ、2009年4月からは、経済学研究科大学院主任として大学院教育の改善に努められました。

教育面では、学部で主として世界経済論および国際経済論の講義とゼミナールを担当されました。世界経済論は学生に人気の科目であり、毎年700人を超える大人数授業に先生は熱心に取り組みられました。先生の温厚な人柄からゼミナールの学生に大変慕われました。また大学院経済学研究科で世界経済特論等の講義を担当されました。国際収支、国際マクロの基礎に始まり、国際経済諸関係の制度化について講じられ、熱意をもって教育に取り組みられました。

先生は、宮崎義一先生、杉本昭七先生から世界経済把握の視点と実証の姿勢を学ばれ、フランスを事例に国際収支分析をふまえて国際分業における地位の変化を析出する観点を打ち出されました。さらに、一国的な労働分析に傾きがちなレギュラシオン派の中において、レギュラシオン分析の枠組みを国際領域からの分析装置として再構築しようと試みられた点は独創的なものでありました。C. オミナミにおける南北関係分析に着眼したことで、レギュラシオン派における国民経済的なフォーディズム分析の限界を打破する可能性が示されています。これをさらに「国際レギュラシオン」ともいべき分析装置として再構築するにあたり、J. ミストラルの国際レジーム分析が検討されました。そこでは、レギュラシオン分析における「発展様式の危機」を「国際レジームの危機」として読み替えることができるのが模索されました。これらの業績が、後進に向けて新たな道を指し示しています。

先生は在職中に脳梗塞により倒れられましたが、見事に回復され、復職後、教育と研究に熱心に取り組みられました。先生の学問と教育への情熱と、大学に対する責任感の強さは私たち大学教員の範とするものであります。奥村先生の長年のご貢献に感謝し、ここに奥村先生の記念号を刊行させていただきます。

2017年9月

経済学部長 菅沼 隆